

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと 風

第173号（2020年10月）



白井啓治

（十三） オクラと小さな秋

（2008年10月2日）

## 『オクラの花に秋の風が腰かけた』

春に、庭の一角にオクラの種をまいたのであったが、すくすく育ち始めた途端、夜盗虫（ヨトウ蛾の幼虫）の奴が一夜のうちに大半を喰い尽してしまった。土をほじくり二匹ほどの夜盗虫を見つけたし潰した後に芽吹いてきた6、7本の苗を大事に育てたのであった。

なんとか元気に育ったのであったが、オクラがこれ程大きな背丈に育つものとは知らなかった。ナスのようにさぞかし沢山の実をつけるのであるうと思つたらそうではないのだった。枝葉の付け根のところ到一个ずつしかつけないのである。八百屋に10本ほどネットに入れられて売られているオクラを見て、結構値の高いものだなと思つていたのであったが、これでは高いはずである。2メートルに届こうかと思うほどに育つのであるが、その図体ほどには収穫はないのである。それこそナスだと庭に6本も植えようものなら、二人

暮しの食卓では食べきれないほど実をつける。もっともオクラだって毎日5〜6個の実を摘むのだから少ないとはいえない。実が小さいから少く思えるだけなのである。ヌルヌルとして少し青臭味を覚える味噌汁が気に入って、毎日褒めてきた。

オクラを育てたのは初めての経験で、その実を嬉しく舌に褒めると同時に、花の美しさに癒された。朝露を光らせて透けるような薄黄色の美事な花である。ナスの花も紫のきれいな花であるが、美しさはない。



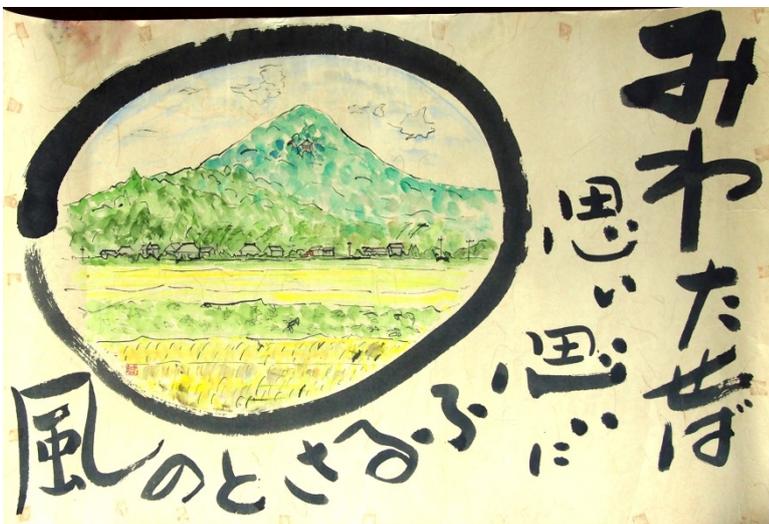
（絵：兼平智恵子）

すつきりとしなない夏の陽気であったが、オクラの花の黄色に癒された感じであった。山繭の淡い緑色に包まれるに似た癒しの花であった。秋分の日、久々にいい天気となった。夕方、庭に

出てみると日差しはもうすっかり赤く秋の色になっていた。秋の紅い日差しは、オクラの花の色も赤く染めていた。日中は真夏の気温であったが、夕方の風は秋の風であった。隣の塀を乗り越えて風がやってきてオクラの花にとまった。ほんのりと茜ねを乗せた黄色の薄絹が風の重さに揺れた。

「小さい秋見つけた」の詩文が頭に浮かび、改めて偉大なる詩人の言葉を思った。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）



（詩：白井啓治 絵：兼平智恵子）

地域に眠る埋もれた歴史(64)

木村 進

【3 片野・根小屋地区】(3)

### 3.3 七代天神社

「大田三楽(資正)」の墓は、昔、片野城があった佐久山にあるが、この登り道の途中に「七代天神社」がある。

山へ少し登ったところで、あまり人も通らないところにあるので、お祭り以外では一般の人はあまり来ないのだろうと思われる。鳥居から正面の拝殿まで参道が続いている。

この天神社の祭典は11月3日正午から行なわれる「根小屋のじゃかもこじゃん」(市の無形文化財)といわれる十二座神楽が残されている。七代天神社は、永禄年間(1558~1570)片野城主太田資正(三楽)が城の守護神として、久慈郡佐竹郷(常陸太田市)天神林から神霊を迎え、その時十二神楽を奉納したと伝えられている。この神楽は、十二種の舞で構成されており、代々この地の長男に引き継がれることから「代々神楽」と呼ばれている。「染谷の十二座神楽」を含め、9月の中秋の名月に行われる柿岡八幡神社で奉納される「柿岡のじゃかもこじゃん」(太々神楽)と合わせると、石岡には三か所も同じような神楽が残っている。皆、400年以上の歴史があるようです。

また、どこの神楽も、12歳以下の地元の女の子が巫女さんになることも共通している。神社境内の樹齢400年以上といわれるケヤキ(樺)と御神木

の杉の木は「石岡市認定保存樹」に指定されている。

この神社は天正年間(1573~1592年)に佐竹郷(常陸太田)から七代天神の心霊を迎祀されたといわれています。

【4 大増・太田・恋瀬地区】(1)

#### 4.1 板敷山大覚寺 大増3220

大覚寺は加波山から吾国山への尾根道の一番低い板敷峠の麓にある。

ここには「親鸞聖人法難の遺跡」の看板が掲げられている。



昔、親鸞聖人が越後に流罪(1207年)となつて、受難の年を送っていたが許されて(1211年)稲田草庵(笠間市)で流布活動をおくっていた。そして稲田草庵(笠間市)から府中(石岡)を經由して鹿島神宮へ行くときによくこの峠を越えていた

のである。一方大覚寺山伏・弁円は修験道の大家として久慈郡塔之尾に護摩堂を建てるなどして、徳を集めていた。

しかし弁円は、日ごとに親鸞聖人の声望が高まるのを快く思わず、ある日、弟子と共に板敷山の頂に護摩壇を構え、聖人を祈り殺そうと三日三晩待ち続けた。しかし、一向に聖人が現れないため、業を煮やして稲田の聖人宅を襲うものの、聖人に会って害心を失い、山伏の身を捨てて門弟(明法房)となった。当寺はその伝承を伝える寺院で、本堂は「出内陣」という特異な形式を持つ。

また、背後にそびえる板敷山には、弁円の護摩壇跡などの旧跡もある。

本寺院は浄土真宗の開祖・親鸞聖人の弟子 周観大覚が開山した。この寺は、山伏弁円(後の明法房)が親鸞に危害を加えようとしたが、回心し弟子となったことを「法難」と呼び、その事実を残し伝えるためにこの地に建てられたものだと思われる。

また、京都にある「桂離宮」を模して造園した庭園は「裏見なしの庭」として有名である。

名勝の庭園は、回遊式庭園の様式をとり、京都にある「桂離宮」を模して造園したもので、どの角度から見ても裏がなく「裏見なしの庭」といわれる。どの角度からも珍しい草木などを配しどこも表の庭の風情がある。

山門をくぐると右側に「親鸞聖人の説法石」と「天蓋樹」とよばれたクスの古樹がある。

石岡市指定保存樹「板敷山大覚寺のヤブツバキ  
(藪椿)」

幹 周 : 1.53 m

樹 高 : 13.3 m

推定樹齢 : 500年

このヤブツバキは樹齢五百年。樹肌に灰白色の地衣類がつき古色蒼然とした樹容は、老樹の風格がある。この樹の傍らには天蓋樹とよばれたクスの大樹があつて、生育を阻んでいたことが推測される。ヤブツバキは暖地の沿海地から山地に自生する常緑高木で数は減少している。現在観賞用に栽培される園芸品種の母種となつた。二月から四月枝先に径五センチほどの花が単生する。古くから信仰の対象であり、一方で幹は建材に、種子からは油を得て利用した。ツバキの語源は一説には、つやつやしい葉の木から。花は色鮮やかなままに音を立てて地面に落ちる。

落ちざまに水こぼしけり花椿

芭蕉

平成14年3月 石岡市教育委員会



板敷峠のすぐ上に建つ  
「山伏弁円護摩壇の跡」

板敷山まで大覚寺から急坂ですが山道を歩いて登っても15分程です。車でも尾根道でいくことができます。この山の上に弁円は護摩壇を祭壇し、親鸞の通るのを待ちました。この護摩壇跡から寺までまっすぐに木々の間を下る道がある。



弁円「懺悔の地」石碑

弁円の歌「山も山 道も昔に変わらねど 変わり果てたるわが心かな」

板敷峠から大覚寺へ下りる道の途中にあるが、峠からの道は倒木などで歩みにくい。下の県道(64号線)側からの登り口から民家の間を抜けて少し登ると少し開けた場所に出る。この山側に碑が建てられている。現在板敷峠はこの県道64号線が昔の峠の少し西側を走っている。この道を歩く人もあまりいないのであろう。

親鸞聖人の弟子となつた山伏弁円は明法房となり、聖人の関東布教の同伴をして各地を一緒に歩いた。ある時この道に来た時に昔、危害を加えようとしたことがあつたことを恥、道端にうづくまつてし

まった。この時に弁円(明法房)が詠んだ歌とされる。この歌と次の歌の2つが紹介されている。 「あだとなりし弓矢も今は投げ捨てて 西に入るさの山の端の月」

### 我が労音史(23)

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

### 1993年の社会情勢と音楽状況

チエコとスロバキアが分離独立。イスラエルとパレスチナ解放機構(PLO)が相互承認し暫定自治協定を調印。ロシアで大統領派が反対派の最高会議派を制圧(モスクワ流血騒動)。カンボジアで立憲君主制採択。欧州連合(EU)条約発効。ウルグアイランド(ガットの新高角貿易交渉)が最終妥結。自民党分裂で細川連立政権誕生。ロシア大統領エリチンが来日。サッカー「リーグ誕生。松村禎三作オペラ「沈黙」初演。

この年逝去の著名な音楽家と文化人：藤山一郎(歌手) 服部良一(作曲家) 有馬徹(ビックバンド) 山本安英(俳優) 笠智衆(俳優) 井伏鱒二(作家) 安部公房(作家) 奥田良三(テノール) 友竹正則(バリトン) 宮下秀冽(作曲家) デイジー・ガレスビー(トランペット) ハナ肇(芸能人)

田中角栄（元総理）マキノ雅弘（脚本家）逸見政孝（司会者）

### 1963年の労音の動き

東京労音創立40周年を迎える年に当たり、労音運動の果たしてきた役割を、社会状況の推移と連動させながら、労音制作の作品を見直し現在に生かす。東京労音の企画力を強化し、全国の労音をリードする力をつけ、労音らしく・労音でしかできない企画の実現を図る。そのために音楽家・音楽事務所との協力関係を進める。会員や音楽愛好者・若者の音楽要求に応える企画を調査研究し、実現に向けて取り組むことが討議された。また組織体制強化のために、ブロック体制の総括し早期企画の決定等の実践的な方針を立てる。会員制度・会費制度など現在の各制度の見直しを図る等が確認された。

クラシックは21種目24例会行い、「中沢桂」2例会、長谷川武久の「音楽の楽しみ」は東部センター例会として取り組まれる。平和コンサートは、中央合唱団と共に「希望のエアメール」を取り組んだが、内容の学習や工夫が足りず、中央合唱団と共に力を集中することが出来ず不十分な結果に終わった。第九の取り組みは、男性メンバーの組織が弱かったが、270名がステージに乗り2例会を成功させた。バレエ例会は「プリセツカヤ」「モスクワ音楽劇場バレエ」を取り組んだが今一つだった。

ポピュラー例会は、32種目53例会、「由紀さおり・安田祥子」は新たに八王子・中野・練馬で取り組まれ、全部で5例会が満席。「アイマラ」（ボリビア）は5例会が取り組まれ各会場共に大きく

盛り上がり、フォルクローレ愛好者の輪を広げる。「高石ともや」は、岡本文弥・永六輔をゲストに迎え満席で例会を開催。「金子由香利」「武田鉄也」「スカーナ」「倍賞千恵子」「イルカ」「なぎら健壺」「東京ロマンチカ」「戸田義明」などが、初めて若しくは久しぶりに取り上げられた。

伝統芸能は13種目34例会が取り組まれ、「高橋竹山」は武蔵村山・昭島・八王子・新宿・品川・葛飾・柏の7会場、「高橋竹与」は松戸・王子・世田谷・中野・ギター館の5会場で取り組まれた。「モスクワ・バラライカアンサンブル」は様々に工夫された取り組みで盛り上がった。「ベトナム民族アンサンブル」は直前の会場変更で不十分な結果に終わる。

創立40周年記念祝賀会は、新宿センチュリーハイアットホテルで350名の招待者を迎えて開催。演奏家・演奏団体・舞踊家・ホール関係者・音楽事務所・音響証明関係者・全国の労音が集まり盛大に開催された。これまで東京労音が音楽会に果たしてきた役割と勤労者の手で音楽会を実現し、多くの感動を与えることにより、音楽会の在り方・音楽家の創造活動の場を提供し、音楽界に貢献し影響を与えてきたことが成功の原因です。「良い音楽を安く多くの人に」「企画運営は会員の手で」「国民音楽を創造育成しよう」の基本スローガンを基に40年歩み続けてきた東京労音、しかし労音が誕生し発展してきた時代と現在では、社会状況と音楽状況は大きく変化し、個人の音楽要求も多様化している。従来の活動のままでは現代の情勢についていけないのは明らかです。そんな中、労音の果たす役割は終わったとの声も聴かれ、職場を基礎としたサークルも現在では、その殆ど

が崩壊している現在、新しい運動形態を模索する時期に来ている。今まで蓄積してきた文化的・組織的財産を生かし、例会（音楽会）希望を基に会員・サークルを組織した基盤を築き、民主的運営を行うため、40年を機に討議していくことが必要。

「夏の友好祭」が4年ぶりに山梨の甲武キャンプ場で100名を集めて開催、ゲストに山形の「影法師」が参加、東部ブロックは2回の例会を取り挙げた。「スキー友好祭」は群馬の片品スキー場で開催66名が参加。友好祭は従来の仲間をつくる運動ですが、中心メンバーだけの参加になっており根本討議が必要。「東京労音交流会」は東部センターで開催55名が参加し交流を深めた。原水爆禁止世界大会に7名を派遣、大会に向け「希望へのエアメール」を2例会、「淡谷のり子&佐藤光正」を3回取り組み、これらの成果を持つて参加した。

全国労音共同海外招聘企画として、「ベトナム民族アンサンブル」「グループ・アイマラ」「モスクワ音楽劇場バレエ」「アントン・ボルダゾフ」に、財団・全国労音会館が助成、延べ73例会に渡る。昨年開館した「ギター文化館」は、世界初のクラシックギター博物館として愛好家に好評を博している。今春より、土・日限定で一般公開、1年間で4102名が来館（1日平均40名）。全国会議が熱海で開催、39団体75名が参加。ひろしま音楽鑑賞協会が発足、森・湯沢・森岡・一関・仙台・上福岡・真由元・西尾・岐阜・四日市・淡路が解散し、67団体。会員制度の確立と民主的運営、企画情報の交流、共同企画について討議された。

（つづく）

## 石岡市指定文化財(二十七) 兼平智恵子

当会報、先月号(一七二号)で紹介しました石岡市ふるさと歴史館に於きまして行われていた「身近な文化財」は、コロナ禍の中にも関わらず、遠くは京都、仙台、東京、千葉、埼玉、水戸市、つくば市、牛久市、取手市等々県内外より一日平均4〜5人のご来館を頂きました。有難うございました。

十月は展示替えとなりまして「古墳出現」と題して十月七日(水)〜十二月二十七日(日)までの展示となります。

紹介のパンフレットによりますと“あつ、弥生の土器の上に土師器の小さな甕がのつてみつかつたぞ”

それは昭和五五年、今から四十年前の事で発掘調査中の担当者の叫び声。

弥生時代の石岡では縄目の文様をつけた土器が使われていました。その土器の上に文様のない、古墳時代の土器(土師器、はじき)が乗っていた。まさに

「古墳時代の幕開け」を目の当たりにしての喜びと驚き、発見者の歓喜の音が聞えてきそうです。

奈良ではウワナベ古墳(五世紀中ころ、仁徳天皇の皇后・八田皇女との説もある)の周濠の発掘調査が十月二日〜十一月三十日予定されています。

宮内庁の管理で、周囲には水をたたえる周濠があり、終戦直後には附属する小古墳から八七二点もの膨大な鉄製品(鉄鋌、てつてい)が出土したこ

とで知られている。今回はどんな発見があるのでしようか。

本題の文化財に入ります。

常陸大掾氏墓所

石岡市国府五九一三(平福寺)

史跡

昭和五三・八・二三 指定

旧町名富田町内に鎮座する北向観音(富田観音)堂のとなり、曹洞宗春林山平福寺の境内に常陸大掾氏の墓所があります。やや中央に全高一・六二mの一番大きな五輪塔があり、その三方周囲には一四基の五輪塔が林立しています。いずれも梵字・種子は風化されたのか、目にする事ができません。

これらの五輪塔は平安時代から戦国時代まで常陸国に勢力を誇った豪族、常陸大掾氏代々の墓塔といわれている。

奈良・平安時代常陸國の中心として栄えた石岡は、中世においても中心地でした。

九世紀半ばから末期にかけての坂東(現在の関東地方)に桓武天皇の曾孫、高望王が平の姓を賜り、上総介に任じられ赴任してきました。赴任に伴ってきた高望王の子、良望(後に国香)は、九三〇年、常陸国初代大掾となりました。しかし国香は天慶の乱で甥である平将門に討たれてしまいますが、国香の子貞盛が藤原秀郷とともに将門を討ち取ったことは有名になっています。

その後貞盛の甥であり、後に養子となった維幹(これもと)が常陸大掾に任命され、代々続くこ

とになります。このように“大掾”とは、もともと役職の名前であったがそれが世襲されることにより大掾氏(だいじょうし)という家名となった全国でも珍しい例です。役職名「守(かみ)―介(すけ)―大掾・小掾―目(さかん)―このようになっています。

維幹やその子孫は本拠地を現在のつくば市水守(みもり)に置いてましたが七代目の義幹の時、当時大掾職を欲しがっていた八田氏(後の小田氏)の陰謀により失脚し、一族の中で、水戸城を拠点としていた馬場資幹(すけもと)が八代目として大掾家を継ぐことになりました。「馬場大掾氏」として栄枯盛衰の歴史は続いていくことになりました。

やがて鎌倉時代の終焉とともに南北朝(一三三六〜一三九二)という混乱の時代を迎え、大掾氏は南朝方から北朝方へと転じ、足利氏とのつながりを密にしてその勢力を拡大していきます。そんな隆盛を極めた時代も過ぎ去り、大掾氏は次第に衰退していき、天正一八年(一五九〇)、豊臣秀吉から朱印状をうけた佐竹義宣氏に当地府中城は攻め滅ぼされることとなります。二十四代大掾清幹(きよもと)、弱冠一八歳、燃え盛る府中城で自刃したと言ひ伝えられています。

さて十五基の五輪塔は、二十四代続いた、どのお殿様の塔か? 一二一四年八代目馬場大掾氏が現在の田島地区に築城したとされている府中石岡城(外城と言われている)主、九代〜十四代目までのお殿様、

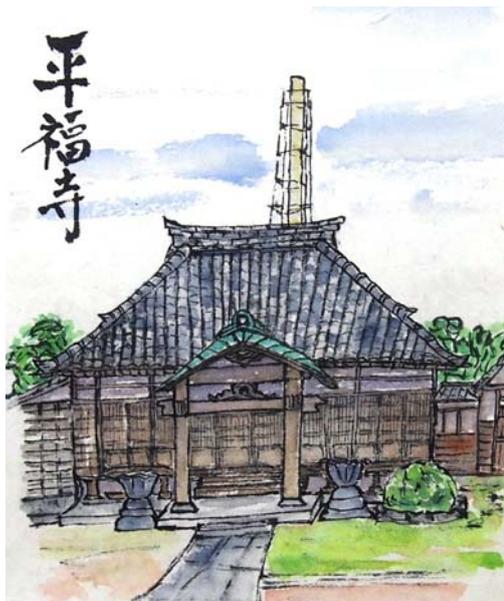
一三四六年一五代目詮国(あきくに)によって、現在の石岡市立石岡小学校敷地内に築城の府中城主、一六代〜二四代目までのお殿様か。

ちよつと気になること、石岡市史上巻にありま

した、府中石岡城主のお殿様は、城の東南隅にあった光西寺が石岡城主の菩提寺であったことを発見。そこには三基残っている。恐らく光西寺に七基あったもののうち、いつの時代にか四基を平福寺にうつしたものと推考せざるを得ないのであると。

早速田島地区へ、残っていた三基は余りにも古い事、分かりませんでした。しかしこの辺に光西寺があった事が確認出来ました。ご丁寧に案内して頂きました。田島地区の皆様ご協力有難うございました。この辺は昔、寺が多かったようでは寺の名前が三面寺、南光院とか地名になっているそうです。因みに光西寺は県指定文化財十一面観音様の近くでした。

参考資料 歴史散策コース案内



○きょうもくろうさま  
油断大敵コロナ侵入

初初しく虫の声

智恵子

### 見えてきたものがある

伊東弓子

二十四日当日は、朝からどんよりとした一日だった。梅雨明けも知らされないままに、第31回故郷の湖・筑波の夕陽を眺めよう(2)の目を、迎えることになった。気が重い。気休めかもしれないが、まだ半日あるぞ、と思いつながら鬼子母神の縁日の方へ足が向いていた。二人が待っていてくれた。今日は婆さん三人の集いとなった。お堂は、板の間なので座り続けるのは難しく、足を労わりながら何度右に左にと、横座りを直したことだろう。背は自然に丸まっている三人。分け合ったお茶菓子を摘みながら話しが弾む。Sさんが池上先生に電話を差し上げたという話題がでた。「特別な変りようはない」とのこと、「声を聞いて嬉しかった」とのことだった。遠く離れた友のことを思い、胸が締め付けられる思いだったが、何事もないように私は振る舞っていた。昼頃迄時間が過ぎて、また一ヶ月後に会うことを願って分かれた。

運動公園の方へ行く、嘗ては十六日川という漁場だ。幾多の変遷があつて、今は運動公園となった。右、田の中に稲荷の森がある。東屋に座って遠くを眺めている中に、いつか居眠りを始めた。目を覚ますのと、涎を拭うのとが同時で、周りを見渡していた。一応人の目を気にした。

今日のはだめかな。雲が空全体を覆っているからねと一人呟きながら堤防を歩き出した。雲の間から薄日が漏れている。期待したい。知り合いのKさんに会った。毎年今頃の時間になると写真撮りの人が沢山来てるんだけどね、と話してくれる。今、堤防には人の姿はない。向こう場で犬の声が

する。偶に小粒の雨水が垂れてくる。今年の七月は湖も空も周囲の景色も灰色に塗られた日が多かった。雨も多かったが、灰色の景色はそれはそれで美しさを感じた。灰色の濃淡に塗られ静まりかえった動かない景色、雲が流れ、波が出来て灰色が移動しても、又味わい深かった。バイクが通り過ぎる。散歩の人、走っている人にも会う。かいつぶりがゆっくり泳いでいる、埒に帰っていくのかなど見ていると、途中で止まってしまった。向こう場に灯が一つ点いた。六時三十一分、とうとう夕陽が筑波の両峰に沈む姿を見ることが出来なかった。みんなはどんな形でこの時間を迎えたのだろう。腰をあげ下高崎水門から家路についた。

一日中恵まれない天気とはわかっていても、期待して期待外れの日だった。朝、急な知らせが飛び込んできた。それは、夜八時から五分だけ、恋瀬川の入口付近で火花を見せてくれるという喜びの土産だった。誘う間もなく貴重な機会を独り占めするのは申し訳ないが、出かけて行つた。離れた所で人の声がする。始まった。懐かしい情景、ここ何年も見えていない遠い昔の中にいるようだった。右の上高崎台に音が反射して戻ってくる。今回は湖水の上を渡ってくる音が初めて味わえた。ドビュ、ドビュ...いや言葉では言い表せないものだった。これで梅雨も終わるといいがどうなることか。これからの夕陽を見られるだろうと、期待して家路を急いだ。余韻を味わいながら、人の技術の素晴らしさや美しさを再確認した喜びでいっぱいだった。

二十五日は、前日よりもっと悪天候で終わった。

霞ヶ浦の現実の姿をしみじみと見たという実感は、やはり「玉里御留川研究会」で歩いたこと、江戸時代の漁場の姿を見つめていこうという執念が、現実では見出しにくい姿と人の心を確り見せてくれた。

一回目は、コスモス播きの前、草刈りをした時のこと、女達は塵拾いをした。下高崎湖岸より上高崎の湖岸、高浜に近い山王川辺りまで、細かい塵、大きい塵の量が酷かった。二回目は、コスモス播きの時だった。区長、会長からの声がかからなかったからだろう。誰も戻り際に拾えば出来たにも拘らず拾いもせず、ただ上高崎よりは、下高崎の方が少ないよねなどと、喋るだけに終っていた。

七月始め、上高崎の方が何故塵が多いか、はつきり分った。大風が吹いて、雨交じりの朝、犬の散歩で歩いた堤防、自分の体も確りしていないと危ない状況だった。波は高くコンクリートにぶつかって水飛沫を上げている。「打ちあたって」という状態だ。その波の背には様々な物が浮いたり、沈んだりしながらだんだん岸に、芦の間に、コンクリートの上に寄せられてくる。その作業というか、繰り返しが集ってきている。芦の周囲、草木の間、コンクリートの上に溜まっていく。その日一日、風の強い日だったから何千回何万回繰り返し返され、南風は大量の塵を上高崎湖岸に置いていった。こういう状況を見ないと、実態というのとは分らないのだ。

とうとう七月中は雨が降り続いてしまった。七月末に、下高崎の岸近くに青こが出た。

八月に入り水が臭かった。青こは消えたようにも見たが臭いは酷かった。

八月末近く沖の方から、湖の中間にと白い物が浮き始めた。それらが岸の方に寄ってきた。芦周辺やコンクリート辺りに集まってきた。大きな魚ハクレンだと教えてくれた。

九月に入り雨が降り、大風の後、ハクレンが大量に芦の間に、コンクリート周辺に打ち寄せられた。山王川近くから、上高崎には大量に、下高崎に沢山打ち寄せられた。見るも恐ろしい何百という数、細かく数えれば何千といっても言い過ぎではない。湖水の酸素不足のためという話しだった。

直ぐ各役場へ電話をした。

銚田国交省 こちらは北浦管轄なので、霞ヶ浦管轄の潮来、麻生の事務所へ連絡をとっておく。と言ってくれた。

石岡市役所

環境課 鯉ではないんですか。八木の方からは特別連絡はありませんね。山王川は市の管轄ですが霞ヶ浦の方は、県の管轄なので連絡していただきます。との返事。

小美玉市役所

環境課 そうでしたか。すぐ対処します。とのこと。

若い議員と現状を見に行ったり、会う人に霞ヶ浦の状況を話していった。

九月中半 各役所への結果を聞きながら、お礼をした。銚田の事務所もすぐ対応してくれたとの

こと。現場に出た人たちは「苦労だったことだろう、と思われる。大分前、高崎漁業組合の人達も「臭いこと。臭いこと」「やりきんねよ」と、言いながらも流れてきた大木を担いだり、泥とりをしていたことを思い出す。地元の漁業組合の人達が元気な頃、漁も盛んだった、水のきれいな頃だった。そうだ、麻生、潮来の事務所にもお礼を言っていない私。

石岡市役所では、県がすぐ対応してくれたとの返事。職員さんは地元の現状を見ておいたかな？小美玉市役所では、見てきました。麻生、潮来の事務所へもお願いしお礼をしておいたと報告有。市長さんを訪ねると、すぐやってくれたようだね。と涼しい顔。あの状況を見に行ってくればよかったのにと心では思った。

彼岸中に田伏まで行く用事ができた。帰り道、田伏・柏崎・小津・高賀津・三ツ谷・八木・井関・高浜と堤防を走り、ハクレンの状況を見た。どの地域にも何匹かが波と一緒に哀れな姿をコンクリートに打っつけながら横たわっていた。かすみから市の南岸、その先、玉造から東南の岸にはどうだろう。など考えること切がない。

釣りをたのしむ人も、自転車で走る人にも霞ヶ浦の美しさばかりでなく、特に汚れの現実の姿を見、知ってもらいたい。そこに住んでいる人達の故郷であることも考えてもらいたい。玉里御留川を歩いてきた私たちが何を行わなければならぬか、見えてきた思いがする。

霞ヶ浦の汚れは、溜池だからどうしようもないというのが一般相場。開けてほしいところは開かない。三〇四十年前この堤防をつくった人達は、



玉里、大井戸公園付近からの筑波山

今の状況を知るよしもないだろうが、その頃気がついていた人はいなかったのだろうか。国も県も地域も“負の遺産”と、なることを知らなかったのだろう。そんなことはあるまい。“負の遺産”を残された今、生きている人達が対処していかねばならない。苦しいことだ。簡単にはいかない。だから、今生きて、政治をしている人も、行政に携わっている人も、苦しさを知っている住民も、これからの子供たちに“負の遺産”をすこしでも残さないように考え、知恵を絞っていかねばならないんだよと、言っていた人がいたがその通りだと思う。

## 仁右衛門島

小林幸枝

仁右衛門島（にえもんじま）は千葉県房総半島南部の鴨川市にあります。

この島は個人所有ですが、千葉県指定名勝となっており、また新日本百景にも選ばれています。

鴨川の太海（ふとみ）海岸に浮かぶ小島が、この仁右衛門島です。温暖なこの地はマリンスポーツ、釣り、いちご狩りなどで年間多くの観光客が訪れます。

島は無人島というわけではありませんが、住んでいるのは、平野仁右衛門さん一家だけです。この仁右衛門島は平野さんが個人で所有している島なのです。

1180（治承4）年、初代の平野仁右衛門さんはある重要人物をこの島にかくまうことになりました。その人物こそ後に鎌倉幕府を開くことになる源頼朝でした。源頼朝は伊豆で平家に対して挙兵したのですが、戦いに敗れ、伊豆半島から船で安房、現在の房総半島に命からがら逃げ込んできたのです。

このときこの平野仁右衛門さんが太海海岸に浮かぶこの小島に源頼朝をかくまい、源頼朝はなんとか難を逃れることが出来たのです。この時に源頼朝が隠れたといわれる洞窟はいまでも「かくれ穴」と呼ばれ、島に残っています。

命拾いをした源頼朝は兵をたて直し、関東を平定し、征夷大將軍となつて鎌倉幕府を開きました。そして頼朝は命を助けてもらったお礼として平野仁右衛門に自分が隠れたその島と島一帯の魚業権を与えたのです。そして島は、初代の島主となつ

た仁右衛門の名をとって「仁右衛門島」と名付けられました。

もしこの時に仁右衛門が源頼朝を助けていなければ、源頼朝はそのまま命を落としてしまつていたかもしれません。

鎌倉幕府はもとより日本はいつまでも武家政治の世の中にはシフトすることができず、日本はまったく別の国になっていたかもしれません。

そう考えると、仁右衛門島は日本の歴史において非常に重要な役目を果たしたことになります。その子孫が、代々その誇りある名前（仁右衛門）を引き継いできた理由も理解できます。

現在の平野家の家屋は、宝永元年（1704）年に建て直されたもので、観光客に公開されています。個人所有の島なので、足を運ぶ時は草花などを

持ち帰らないように注意してくださいね。

## 〈父のこと 25〉

菊地孝夫

〔安倍総理辞任。8月28日〕

公式な発表によれば、「潰瘍性大腸炎」という病名になっている。難病だということで、病には勝てず、健康上の理由で辞任ということなのでしょうかね。

健康上の理由ということであれば、致し方ないのだろうが、後任の総理・総裁候補は誰がなるのだろうか？

この、長期にわたる政権の間に積み残された課題はたくさんあります。

巷間、いろいろと取りざたされているようです

が、この会報が出るころには、決まっているのだらうね。

さてさて、どうなりますか？

などと言っているうちに、あれよ、あれよという間に、新総理が決まった。

後任は、秋田県からの初の選出となった、菅義偉元官房長官に圧倒的多数であつさりと決定してしまった。実家はイチゴ栽培で財を成した農家ということ、高校卒業後、上京して、二浪して私学に入学、苦学したということだ。

現在は、横浜市の選挙区から選出された国会議員で、かつては、横浜市議も2期務めたということ。所属派閥はなく、無派閥ということだ。自民党の新たな役員人事も組閣も慌ただしく決定した。

新総裁の候補については、解説をする政治の専門家たちから何人も名前が挙がったが、いずれも、「アリ」かなと思える人々のようにみえた。

「アリのお話し」

この地球上に、「蟻」は、正式な学名が名づけられているだけで、10万種類いると言われている。研究者の中には、20万種類以上いるという人もいる。

北から南まで、極寒の地を除いて、あらゆる地表に広く分布している。

数ある昆虫の中でも、その種類は多いのではないだろうか？

この日本にも、数十種類が生息している。

日常的によく見かける昆虫だけれど、どうやらその実態はよくわかっていないらしい。

4億年ほど前から、この地上に現れたらしいといわれている。

その体が、あまりにも小さいので、化石もそんなにたくさんは見つからない。

準寶石の「琥珀」の中に閉じ込められたものがよく知られている。

琥珀は針葉樹などの樹脂成分の「やに」が固まって、ときには数千万年の長い時間かけてできたものであり、そのなかで透明度が低く、色の悪いものは、溶かして膠の材料として、塗装剤として使われる。

この日本でも、かつては採取され、膠の原料とされていたようだ。現在は石油化学塗料が広まって、膠自体の需要も激減したようだ。

残念なことに、その「こはく」の中にあつたかもしれない、貴重な蟻の化石は、ごみといっしょに捨てられてしまった。

地上だけでなく、高い木の上に巣をつくるものもある。木の葉を巧みにとじ合わせて、巣をつくってしまうものもある。

葉切りアリの一種は、巣の中で、「キノコ」栽培をすることで知られている。さらに、驚くべきことに、ハタラクシアリは、この「キノコ」が異常繁殖しないように、コントロールする、フェロモンを、自らの身体から出しているらしい。

人間以外の動物で、農耕をするのはこの、ハキリアリぐらいだろう。

植物に着くアブラムシを、家畜のように飼っている種類もある。

また、サムライアリなど、いくつかの種類では、ほかのアリの巣を襲って、その繭や卵を奪い取

り、巣を持ち帰って、孵化したあと、そのアリを、奴隷にする。自分たちは、働かないのだ。

これなども、人間の振る舞いと似ている。

黒アリ。赤アリ。黄アリ。緑色のアリもいるそう。

（家の土台をかじる、「白アリ」、は少し種類が違って、むしろゴキブリに近い種類である。）

「蜂」とは、共通の先祖を持つ、近い種類であると言われるが、いづろ分化したかがわかっていないようだ。

アリの中には、蜂のように、毒針を持つものもある。或いは、鋭い顎を持っているものもある。ひどく騒がれた、「ヒアリ」などお話にならないぐらい獰猛なものもあるらしい。

何せ、数が多いから、「ニクアリ」と呼ばれる、肉食のやつなどは、牛など、見る間に骨だけにしてしまうらしい。アマゾンでは、すっかり食べられてしまった人もいたということだ。また、毒針による猛毒で、命の危険もあるという。

また中には集団で大移動する種類もある。何千匹という集団は、行く手を妨げるものすべて食い尽くしてしまう。「黒いじゅうたん」と呼ばれるこの群が来たら、住んでいる家を放棄して逃げるしかない。通り過ぎた後の家に帰ると、中にはきれいさっぱり何も残っていない。総てありに食べつくされてしまったのである。

幸いなことに、在来日本のアリには、さほど

獰猛なもの、猛毒なものはいない。

兇悪な外来種が入ってくることも考えられるけ

れど、南方系なので、日本の冬を越すことはできなさそう。

とはいえ、これからは、暖房が利いた密閉されたマンションや住宅などでは越冬する可能性が出てくるから、あまり安心してしまえないかもしれない。仮に、侵入を許してしまえば、その駆除はほぼ不可能となる。

外来の動植物の害がしばしば取り上げられているが、実は日本原産の動植物が、海外で深刻な被害を与えていることはあまり知られてはいない。外来種の被害国であると同時に、加害国であることも忘れてはいけない。

アリの多くは、蜂のように、女王を中心としたコロニーをつくって共同生活をしている。

働きアリは、その身体の何倍もある食物を、せつせと巣まで運ぶ。大きな昆虫を、集団でよってたかって仕留めてしまう。あるいは、ベビーシッターのように巣の中の幼虫の世話をする。

女王蟻は、卵を産むだけで、そのあとの餌やりなどはすべて、働きアリの仕事である。

洋の東西・古今を問わず、蟻は「勤勉」の象徴とされてきた。

オスアリは、時には、一匹しかいない女王蟻を巡って、殺し合いをしたりもする。こんなところも、なんだか、人間界を思わせてしまう。

中国の、古いお話には、「南柯の夢」というよく知られた物語がある。

貧しい若い書生が、王国の王女様の婿になり、栄華を極めるが、実はそれは覚めてみたら夢であり、庭の樹の洞に巣食ったアリの王国で、任地と

なったのは南の枝だったというお話です。

この話には、樹上に巣をつくるアリの生態がたくみに描かれている。

おそらくは、いにしえの中国人の中にも、そうしたうな「虫マニア」がいたのでこのようにアリの生態を正確に描写できたものと想像することができ。

参考：「ありとあらゆるありのななし」 講談社

「聊齋志異」

## 風と共に 《理》

### 大輪啓展

#### 六 哲学（3）

先月からの続きです。

朝晩には、寒さを感じる季節へと移ってまいりました。

コロナとの関係は今後も続いて行きそうです。各々が自身の身を守るよう徹底していく必要があります。

日本だけでなく世界中の動向も今後気になります。治療薬を含めた対策が迅速に実施されるよう祈っています。

さて、前回に引き続きまして【絆】について、

前月におきましては、親子に対する絆について、物事の考え方に対する独自の目線からお話させて頂きました、今回は友人その他の係りを持つ人に対する絆を私目線で分析していきたいと思えます。

友情、情け、人それぞれ感じ方に違いはあれど、少なからず誰しもが持っているものではないでしょうか。

特に若い頃は、学校やコミュニティを通して、友達との関係や友情の築き方について、悩んだり一喜一憂したりしていた事を思い出します。

個人の話しですと、昔から良く信じては裏切られたり、敵だと思っていた人物から思わぬ助けを得たり、都度都度沢山の感情と成長の一端として、私を形造る糧となってきました。

幼少期から、大人へと成長していく過程で、心情的な変化はどの様にして起きていくのか、その辺りについて少し考えてみましょう。

小学校まで、薄い記憶ではありますが、仲良しグループ、所謂派閥的な集まりが徐々に形成されていく。友達との関係性は希薄で、切れたり繋がったりを繰り返す。

中学校まで、先輩・後輩を通して縦社会を学び、派閥の形も少しずつハッキリとなっていく。友達との関係性は、徐々に強くなり嫉妬心や執着心等がでてくる。

高校まで、大人としての社会に少しずつ足を踏み入れるにあたり、友情というよりも損得勘定や駆引きがはじまる。

それ以降、大学・社会人として、様々な形が出来る。上がる。

利害関係、唯一無二の存在、腐れ縁 e t c。

特に20歳を越えた辺りからの人との係り方については、多種多様なものがあると思います。

ただ一つ、共通して言える事は、それが良い関係なのか悪い関係なのかという事です。

仕事上の付き合い、ご近所付き合い、仕事や住む場所に大きく影響され、どちらの関係もすぐに切れるという事はないでしょう。

だからこそこれが、良い関係でないと目も当てられません。

勿論、関係というものは、築き上げていくものです。ですから、良くするのも悪くするのも日々の積み重ねによる所が大きいと言えるでしょう。

さらには、相性なんてのがあるんです。

一眼見た瞬間から、この人とは話が合いそうだなとか、この人は生理的に受け付けないとか、見た目の問題もありますが、第6感とも野生の感とも言えるかと思いますが、そういったレベルで本能的に感じ取るもの、そこで躓いてしまうとそこから数年なのか数十年なのか、まるで拷問の様な日々を過ごさなくてはならないかもしれません。事前に調査する事ができれば、自身にとってより良い環境に身を置く事も出来るのですが、中々難しいといのご現実です。

ここまでくると、おそらく皆さんもお気づきかと思いますが、幼少期の頃に共に過ごしてきた友人より、社会に出てから知り合う人との繋がりが特に人生を左右していく存在ではないでしょう。

うか。

当然、昔馴染みと生涯を密に過ごす方も大勢おられますから、一概には当てはまりませんが、歳を重ねていく過程でその中盤に息の合った仲間が出来る、自然とその仲間や輪を持って、ある程度の共有感や距離感を築きつつ、人生を謳歌していくのではないでしょう。

会社やご近所付き合いにおいては、トラブルを避けつつお互いに譲り合い思い遣りの精神を持って、日々を穏やかに過ごしていきたいものです。

元来、弱肉強食の世界から文化を身につけて繁栄した過去から、本質を考えれば他者とは相入れないのが本懐です。その中であつても理性を前面に押し出し、人たる所以をしつかりと守りつつ、個性を尊重し今後もさらなる発展へと寄与していきたいでしょう。

想像出来る事は為し得られると同等だと、私自身もそう信じています。

この続きは、次月とさせて頂きます。

内容は全て私の主観です。

## 【風の談話室】

### 《読者投稿》

やまと書いし (44)

やまと女

毎日が労働、働くことがあるのは幸せなことですねえ・・・。

いつになったら楽園になるのやら・・・

・だいぶ涼しくなり・・・散歩は、稲刈りの済んだ田圃が点々とする農道を5キロ、帰りは筑波山麓に沈む夕日に向かって歩く。

・散歩中よく見かける、カラスウリの蔓。今の時期は、白い可愛い蕾をつけている。秋になると、俵型の朱色の可愛い実をつける。花は一夜だけ咲き、朝には萎んでしまう。その花を見ようと、夜10時ごろ懐中電灯を持って出かけるが、花は見当たらない。そして犬に吠えられ残念ながら諦めたが、一計を思いつき蕾の付いた蔓を持ち帰る。コップに水を入れて刺して置いたら、夜8時頃見事に花開いた。白い糸が一本一本伸びレースの様な可憐な花、カラスウリの花に暫し見とれた。

・9月に入り、日々短くなる陽に秋を感じる。夕方の散歩も楽になり、隣の集落迄5キロ歩く。途中手入れの行き届いた畑に立派なナスが育っていた、凄いなと・・・話しながら歩いていくと、畑の奥で草取りしていた叔母さん、ナス持っていないか？と声がかかった。吃驚して立ち止まると、褒めて貰ったお礼ですと、いんげん、キュウリ、ナス、などを持たせてくれた。なぜか帰りの足取りは軽い・・・。

・お米の収穫も進み、すっかり周りの景色が変わってきた。隣近所から新米も頂き、庭に落ちた栗を拾い、季節の栗ご飯も頂いた。季節は秋に向かっていくのに、裏庭の山つつじは何を勘違いしたのか、次々と花を咲かせている、狂うのは人間だけでないようだ。

・ご近所さんから貰ったホテイアオイ、水繫殖力旺盛のことに吃驚。6つの水槽が超過密状態、涼し気な花も咲いてきた。友人達にも分けてあげ、それでもどんどん増えている。しかし、楽しむのも今のうち・・・寒さには弱いので、冬場には枯れてしまう。

・数年前から頼んでいた、家周りの伸びきった植木の伐採。空師（植木職人）2人の息がびったり、チェーンソーを巧みに操り、まるで理髪師のよう・・・どんどんさつぱりして行く。今日は猛暑も収まり、多少涼しくて仕事が捗ったようだ。伐採がおわるまでどうか酷暑戻りませぬように・・・。

・涼しいなと思ったのは朝だけ、今日は3人の空師・・・。滴り落ちる汗、お陰様で家周りが明るくなる。コロナで憂鬱だった気分がすっきり。明日からは伐採した枝の始末と、ストーブ用に切ってもらった薪の片付けで忙しくなりそう。

・連日の猛暑日、今日もとにかく暑かった。夕方5時過ぎ散歩に出て5キロ程歩いて帰ると、Tシャツはびっしょり、シャワーを浴び、池之端の居酒屋を見ると電気がついていて。いつも開店の時間は遅いのでなかなかタイミングが合わず暫くご無沙汰していた。早い時間だったので誰もいず、冷酒など飲んで久しぶりにのんびりした・・・。

・田んぼが黄金色に色づき稲穂が垂れ下がってきた、間もなく唸り声を上げてコンバインが行き

交うことでしょう。散歩中、残暑厳しいなか稲穂の間を歩いている人を見かける。稗とか粟とか田圃の雑草を抜いているんだらう？こんな農家の人のおかげで美味しいご飯が頂けるのですね。感謝・・・！

・散歩道の途中に福神草の花が咲いていた、2ヶ月以上も経つのにまだ咲いている。茎は1m以上もあるでしょうか。赤い蕾から次々薄いピンクがかかった白い花を咲かせ、なんとも綺麗です。



### いよいよ秋

燕石（えんせき）

猛暑日が続いている。みんな口を開けば、「暑い、暑い」という。犬猫だつて、鳥だつて、この暑さには参ってしまうだろう。出かけるたびに、汗びっしょりになってしまふ。見上げる青空には夏雲が浮かぶ。

台風がいくつか接近中。

上陸するのはあるのだろうか？と思っていたら、10号が九州に上陸した。そのまま九州を南北に

縦断して、韓半島に上陸した。北朝鮮から中国にまで、広い範囲に被害を及ぼした。幸いなことに、どうも風台風だったようで、被害はあまり酷くはなかった模様だ。

秋彼岸の頃には涼しくなるのだろうか。

石岡の祭りが、新型コロナ・ウイルスの感染拡大を恐れて中止となってしまい、例年になく静かな九月である。

いつもの年ならば、今頃は盛んに太鼓やおはよしの練習の音がそちこちから聞こえていたものだけれど、今年はそれがすっかりなくなってしまった。数十年長く続いた祭も、いったんここで途切れてしまった。

それを淋しいという向きもあるが、たまには静かな秋もいいものだ、と、おもう。

この八月から、携帯電話もパソコンも不調が続いている。猛暑のせいではないと思うけれど、一旦よくなったかと思うと、またダメになる。しばらくあれこれいじってやらないと、まともに動いてくれない。操作に時間がかかり、はてさて、困ったものだ。

とりわけ、「スマホ」という携帯電話には悩まされっぱなしである。

画面が小さいので、文字を打つのに時間がかかる。漢字変換しようとしても、まず、一発では変換されたことが無い。ほんの数行の短い文章を打つのに、数分もかかってしまう。いらいらっしっぱなしである。ようやく、終わるかなと思う頃、画面には、

「そろそろ、動作が重くなっているので、メモ

リーをクリーニングしたほうがよい。」、  
という、「脅し文句」が現れる。

「そうか」というので、言われるがまま操作すると、そこには無関係のサイト広告が、あとからあとから出てきたりする。

そっちのほうも商売だから、ただで機能を提供するわけではないのはわかるのだけれど、それにしても、度が過ぎるように思う。

ようやくの事、余計な画面をみんな「排除」して、元の画面に戻ってみると、苦心して打ち込んだ文章が、なんと全くの「白紙」になっている。また、一からやり直しである。やれやれとため息をつきながら、しばし格闘する。

やがては、うんざりしてしまって、しばらく放置することになる。

新しく購入した無線のキーボードも、まともに動かない。入力に余計な時間ばかりかかってしまう。ついにごうを煮やして、分解し、改造して使っている。どうもこの国の製造技術は、かなり落ちてしまったのではないか。安かろう悪かろうという時代に戻ってしまった感がある。

また、「便利さ」というものは、「不便さ」と表裏になっていることをあらためて気付かせてくれることとなった。

このぶんでいくと、いつまでたっても原稿が仕上がらないことになる。

旧暦では、10月25日が「重陽」の節句にあたる。

秋の夜に、御馳走を携えて、三三五五、小高い丘に登り、俗塵を去って、しばし清談にふけると

いうのもまた風流でいいかもしれない。

東京都の首脳部は、とうとうしびれを切らしてしまったのか、規制緩和に踏み切った。  
こりや、あカンワ。

国内旅行もやがて以前のように、自由になるのだろう。イベントの観客数の制限もいずれすべてなくすしに、なくなっていくのだろう。

たとえその結果、多少の犠牲者がたととしても、それは多数のための経済効果を優先する、「やむをえない」犠牲であるという方向へ舵を切ったようだ。

この選択が、果たして「吉」と出るか「凶」と出るかはまさに、神のみぞ知る、だ。

今度の新型コロナによる経済への影響が、どのくらいになったかという集計はまだ出ていない。一部の速報値では、三、四割と言ったところだろうか。或いは、六割を上回るダメージなのだろうか。

いずれにしても、この世界的規模の大不況状態から、経済が短期間にV字回復することはとても望めそうにない。小手先の対策を幾ら繰り返しても、大きな効果が望めないのは、これまでの例を見ても明らかだろうと思う。

いずれはこの新型コロナの流行も治まるだろうけれど、そのあとに現れる新しい形の世界像がどうなるかは、誰にも予測不能だろう。はっきり言えるのは、従来の価値観とは全く異なった事象が出現すると思われる。

巷では、マスクを着用する人が、目に見えて減っている。マスク着用を巡る大小のトラブルも

起きています、

行き過ぎとも思われる、過剰なまでの「消毒」の強要、消毒剤の散布。

そのせいかどうか、この夏捕獲した数匹の昆虫は、総て、数日で死んでしまった。過剰な消毒薬の大量散布が、小動物に悪影響を与えない筈がないだろう。

古い書籍を読んでいたら、その中に、「燕石」という号を持った人が出てきた。昔の中国にも同じ号を持った人がいたようだ。

どうも今回は、残念ながら尻切れトンボに終わってしまいそうだ。

## 茨城県の難読地名とその由来(7)

木村進

### 伊古立【いごたつ】 下妻市(旧千代川村)

「伊古達」とも書く。角川の日本地名大辞典によればこの「伊古立」の名前の由来として次の2つの説を記載している。

- 1、東隣に伊古田・いこ田の小字が現存し、かつて伊古田の津があったことに由来する(結城郡郷土大観)
- 2、低湿地に立地することから「ゑぐ田」に由来する(趣味の結城郡風土記)

また江戸時代から、見田(みだ)・唐崎(からさき)・長萱(おさがや)・伊古立(いごたつ)

の四カ村は一村のように密集しているので四ヶ村(しかむら)と呼ばれていたという。

戦国時代の覚え書きにも「いこたつの村」と出てくるという。

### 子思儀【こしぎ】 筑西市(旧下館市)

角川の日本地名大辞典によればこの地は大谷川の上流右岸の平坦地に位置し、古くは森添島(盛添島)のうちであった。室町期には「小節木」(1440年の文書に伊佐郡小節木とある)と見え、1478年に水谷勝氏が下館城を築城し、この地が水谷氏の支配下になり、森添の小伏木(子不思儀)となり、いつの間にか「小伏木」が「子不思儀」と書かれるようになった。明治初期に現在の文字に改められたようだ。

### 嘉良寿理【からすり】 石岡市(旧八郷町)

この嘉良寿理(からすり)という地名は、まわりの地名と比べてとても違和感がある。まったく地名らしくない。また「り」はどういうわけだか「里」ではなく「理」である。

「八郷の地名」(八郷町教育委員会編)では、地名の由来として、

「元禄郷帳には鷹爪、天保郷帳では烏瓜、「新編常陸国誌」では烏瓜(加良須字里)、明治11年(1878)の大日本帝国参謀本部陸軍部作成の地形図は加良須里とある。

現在は嘉良寿理と表記している。本来は「涸州里」で水の少ない谷津地集落の意であろう。

一方では「唐住里」で大陸渡来人の住んだ集落説を唱える説もある。」

と書かれている。

平凡社「茨城県の地名」では、「烏瓜村」(からすりむら)について、恋瀬川から東に延びる谷津田の最深部に位置し、・・・常陸国府に通ずる古道(瓦谷街道)が村内を通る。そして、室町期の回国聖の遺跡として貴重な経塚「嘉良寿里経塚」と貴船神社が紹介されている。

確かにあまり川もない水の少なそうな地域ではあるが、この地区にある古い神社は「貴船神社」と言い、大きなスタジイの古木がそびえている。貴船神社は水神を祀る山の神のように思うが・・・。

このあたりから隣の上林(はやし)、下林など含め平安時代の拝師郷だった場所だと思ふ。今はゴルフ場もでき山は開発されている。昔は地名を「烏瓜(からすり)」だったとあるので、漢字は後からつけた当て字だということはわかる。

やはり、由来の2つ目の案である「唐住里」は渡来人が住んでいた場所と呼ばれたのが最初だったのではないかと思ふ。

この少し下ったところが「瓦谷」などがあり、奈良時代には常陸国分寺の屋根瓦などが焼かれていた。

### 常陸旧地考(4)

菊地孝夫

○藪木(すき)郡

國誌に、筑波郡に杉木村在り、里の話に、藪木と相近く、或いは即ちいわゆる、藪木郡と、あまり無く考えるべく、以て識者を待つ、云々。

### ○秋津郡

國誌に、今あるところを知らず。考えるべくもなし、云々。

右の三郡、前の十一郡に通じ十四郡を為し、拾芥鈔に載せる所の広狭長短今、皆すでに知るべくもなし云々。

### ○関郡

國誌に、真壁郡に大関村在り、けだし、いにしえの関郡の地なり、云々。

右一郡東鑑に見え、今その地を得難し、云々。

### ○郷ノ部

和名鈔に載りたる郷百五十三。

当時大地に在ったが、代々を経るうちに、或いは文字の変り、名の変化し、また元の名のいくらか片隅に残り、元のこととはあらぬ名に成ってしまうなどもあって、いまの世には知られていない。

中津世の乱世のつづきて、世の人心あらいにあらいて、故事もみやびごとも廢れに廢れて、何事もたどたどしく、地名などは、ことの知られないのが多く、無きにける。

今いにしえにも、たぐい希なる安御世の御恵みに遇いて、古き世のことどもなど数々現れ来るに、

古き地名も知られぬこともあるのを、憂いて、考  
え出る人、國々にい出きにけりゆえ、今この常陸  
の国名を所々考えい出たるままに記しぬ。なお、  
末だ考えの無きは、いまよりあと考え出たらん人  
が書き加えてほしい。

○坂戸(さかと)

和名鈔に新治郡坂戸郷あり、郡の中に今あるとこ  
ろを知らず。

郡中に坂戸村在り。トとタと通音なれば、これ成  
るべしと訛りたるうえは、文字をも書きあらた  
めること無きにあらず。

○竹嶋(たけしま)

和名鈔に、新治郡竹嶋郷あり。郡の中に今あると  
ころを知らず。

國誌に、竹嶋、いま按ずるに、属す真壁郡と見え  
たり、今真壁郡に高嶋村在り。これなるべし。こ  
のあたり、下野國の堺近く、今は新治郡とは隔て  
たれども古くは新治の地なり。

次の羽方村、井出村なども新治の地なり。

また風土記に新治郡北は下野、常陸二國の堺云々  
と見えれば、下野の堺まで新治の地であること  
疑いなし。

○沼田(ぬまた)

和名鈔に新治郡沼田郷あり、郡の中に今あるとこ  
ろを知らず。

筑波郡に沼田村在り、山の麓なり、これ真壁郡に  
いと近い、これではないか、猶考えるべし。

○伊讚(いさ)

和名鈔に新治郡伊讚郷あり、郡の中に今あるとこ  
ろを知らず。

葦穂山の西、新治郡近く真壁郡に、伊佐部村あり、  
これではないか、なお尋ねるべし。

○轉(はか)多(た)

和名鈔に新治郡轉多郷あり、郡の中に今あるとこ  
ろを知らず。

國誌に轉多、いま按ずるに羽方、属真壁郡と見え  
る、この羽方村は上の高嶋の近くなれば、新治の  
地なること疑いなし。

○巡迴

和名鈔に新治郡巡迴郷あり、今あるところを知ら  
ず。この郷は訓注がなく、どう読むか不詳。

○月波(つきば)

和名鈔に新治郡月波郷あり、今あるところを知ら  
ず。

真壁郡に筑波村(あり)これではないか、なおよ  
く尋ねるべし。

○大幡(おほはた)

和名鈔に新治郡大幡郷あり、今あるところを知ら  
ず。

郡中に大畑村在り、これなるべし。郡中西の方、

十三峠にのぼる麓に小畑村在り、大ナニ小ナニと  
対でいう地名多ければ、これ大畑小畑と向かい  
たる地名なるべし。大畑の方を大バタケとよぶは、  
後の誤り也。

○新治(にいはり)

和名鈔に新治郡新治郷あり、今なお新治村在り。  
これ成ること郡の条に云えるが如し。

○下(しも)真(つま)

和名鈔に新治郡下真郷あり、郡の中に今あるとこ  
ろを知らず。

國誌に、一つは、下妻、今は下総国結城郡に属す  
と見えたるは、誤りにて、これは、真壁郡の下妻  
村と聞いている。これは、下総國の堺にて、結城  
郡の隣り、上の沼田、筑波よりこのあたりまで新  
治郡である。

○巨(お)神(かみ)

和名鈔に新治郡巨神郷あり、今あるところを知ら  
ず。

國誌に、巨神、いま按ずるに小神属筑波郡と有り、  
今、小神という処の名は聞こえず。

いま按ずるに、郡中東南によつて、霞の浦近く男  
神村ありこれなるべし。オカミをヲカミとあやま  
り、男神と書き換えた。

万葉集注釈に引きたる風土記の文に、新治郡驛家、  
名を巨神という、そう稱する所以、大蛇多くあり、  
この驛家の名云々と見える。

驛家・えきか、うまや。街道要所にほぼ等間隔に置かれた、官宮の馬乗継場。

\*驛家の郷名有り。また和名鈔には諸国の郷名に多く見られる。

○井田(いだ)

和名鈔に新治郡井田郷あり、今あるところを知らず。

國誌に、いま按ずるに飯田、属真壁郡とみえ、飯はイヒにて、仮字も違い、地勢も新治には遠い。上の高嶋村・羽方村に近く、井出村在り、これなるべし。井ダを井デと訛り井出とは書き換えたものなり。

○神代(かむしろ)

和名鈔に真壁郡神代郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○真壁(まかべ)

和名鈔に真壁郡真壁郷あり、今の真壁村これなり、詳しくは郡条に言う。

○長貫(ながぬき)

和名鈔に真壁郡長貫郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○伴部(ともべ)

和名鈔に真壁郡伴部郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

國誌に、いま按ずるに伴部属西那珂郡と見える。これは今の茨城郡友部村にて、加茂部村の西なり。この加茂部村は、いま羽黒村という。このあたり、いにしえは、新治郡なり。國圖をかながうるに、このあたりを西那珂郡としたるは誤り。いにしえは全く新治の地にて、真壁郡戸は上の高嶋、羽方、井出の村々を挟みて、東なれば、これにはあらず。

○大苑(おほそね)

和名鈔に真壁郡大苑郷あり、國誌に、於保曾乃、今、大會祢と見える。苑をソネと読むは下総國に蛇園と書きてへビソネとよぶ村在り。

和名鈔に、土佐國長岡郡大曾(おほそね)あり。

○大村

和名鈔に真壁郡大村郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○伊讚(いさ)

和名鈔に真壁郡伊讚郷あり、郡の中に今あるところを知らず。下野國の堺に伊佐山村在り。これではないか。なおよく尋ねるべし。

○大貫(おおぬき)

和名鈔に茨城郡大貫郷あり、今なお筑波山の南、櫻川近く大貫村在りこれなり。

○筑波(つくば)

和名鈔に茨城郡筑波郷あり、今の筑波村これにて、そのあたり広く筑波に郷なること郡の条に云えるが如し。なお神社の条にも山の条にも言うべし。

○水守(みもり)

和名鈔に茨城郡水守(みもり)郷あり。郡の中に今あるところを知らず。

國誌に、水守、今、新治郡に属すと見える。郡圖をかながうるに、新治郡の水守村あたりは、いにしえは筑波郡にて、この水守村なること疑いなし。里人はこれを、ミモウリと呼びならわしている。

○三村

和名鈔に茨城郡三村郷あり、郡の中に今あるところを知らず。國誌に、三村、今、新治郡に属すとあるは誤りなり。

新治郡の三村は筑波郡の地にあらず。詳しくは新治郡の条にいう。

○栗原

和名鈔に茨城郡栗原郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

國誌に、栗原、今、新治郡に属すと見える。今なお新治郡の中に筑波郡に近く上栗原村、下栗原村在り。

郡圖を考うるにこれ成ること疑いなし。

○諸蒲(もろかば)

和名鈔に、茨城郡諸蒲郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○清水

和名鈔に茨城郡清水郷あり、郡の中に今あるところを知らず。  
但し新治郡に、筑波郡に近く清水村在り、これ成るべし。

○佐野

和名鈔に茨城郡佐野郷あり、郡の中に今あるところを知らず。  
新治郡に、筑波郡に近く佐谷村在り、上のシミズに近い。

さて佐野の野はやと読み、これではないか。  
和名鈔に、撰津国嶋下郡新野(にひや)郷あり、また近江國野洲郡有り。これら野をやの仮字に用いている。なお考えるべし。

○方(かた)穂(ほ)

和名鈔に茨城郡方穂郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○大野

和名鈔に信太郡大野郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

郡の内に大谷村在り。大野は、オホヤと読んでこれではないか。野をやと読むは上の佐野のところと言うが如し。(続)

### “ふるさと”風”の会異聞 打田昇三

気象庁の外郭団体と間違われそうな名称だが実は此の会が出来るに至った経緯が少し複雑で私に其れに絡み、さらに今は亡き白井啓治先生に多大の迷惑をお掛けした上に、現在では後を継いで会を運営して下さる木村進さんにも何かとご負担をお掛けして誠に申し訳ないので、反省の意味を込めて創設時の裏話を告白して置く。

私は昭和五十九年五月に自衛官を定年退官してから、つくば市に在る農林水産省の弘済会に十数年勤務した。其処でも定年を迎えたのだが仕事が民間会社に移った関係で一年延長し、引き続き勤務するように言われたけれども蟻では無いから「働くだけ」の一生もどうかと思ひ自由の身となった。

其の頃に地元の小学校教員をされていた方々(主に女性)が読書会を開いていて、私は其れに誘われた。読書好きでは無いがお茶が飲め、お菓子が食べられる誘惑で暇潰しに入会したのが運の尽きで「石岡市文化協会」に関わることとなり、或る時に、其の行事で「知人に頼まれ見学に来た

…」という白井先生に遭遇したのである。

其の会話からプロの脚本家と知った私は其の事を回りの人たちに話したところ其れが商工会議所に伝わり「石岡市振興事業」として「ふるさとルネサンス塾」による「民話ルネサンス講座」が開かれる：という大変な事になってしまった。二〇〇四年(平成十六年)六月に商工会議所主催で盛大な開講式が行われたのである。

講師を委託された白井先生の許に、受講生として兼平智恵子さんと私と、少し遅れて小林幸枝さん、伊藤由美子さん、他にも何名か居たのだが、講座(授業)内容が厳しいので何人かが抜けた。私も逃げ出すことを考えたが、種を撒いた責任もあるので「辛抱するしか無い」と諦めた。

二〇〇五年(平成十五年)一月には生き残った受講生たちが白井先生の指導を受けて「ふるさとルネサンスの会」を発足させ、九月には、其の作品展が開かれるほどになった。活動の様子がNHKテレビや朝日・読売・茨城・常陽の各新聞、石岡市報、タウン誌で報じられたのは其の頃である。

そこで会報を発行することとなり二〇〇六年六月から「ふるさとルネサンスの会会報」(後に「ふるさと風」と改称)が出たのである。当時のメンバーは最初と変わらない。風は順調に吹いていたのだが近年になって、其の後に入会された菅原さんが不治の病で他界されてしまい、更には、白井先生も思いがけ無い難病を罹患され闘病の甲斐無く世を去られたので「ふるさと風」の会」は重大な危機に直面した。

其れを救い白井先生の後を継いで会を継続して下

さっているのが第七十八号から参加された木村進さんである。更に長年に亘り、会がお世話になったギター館の木下前館長が入会して下さり、新会員も加わり会は何とか続けられる様で有難い。私も呆けながら何とかついて行くので面倒を見て頂きたくお願い申し上げます。

### 【特別企画】

#### 打田昇三の太平記(2) 巻第一・2

#### ○無禮講の事、附・玄慧文談の事

後醍醐天皇の近臣たちがクーデターの準備を始めた頃に、美濃国の住人で清和源氏の系統を引く土岐伯耆十郎頼定(ときほうきのじゅうろうよりさだ)と多治見四郎国長と言う人物が居た。共に武勇の誉れが高かったので、日野資朝が知人を介して近づき交友関係を結んだのだが、クーデターに誘うには少し躊躇(ためらい)があった。

そこで懇親会と称して無禮講のパーティを開くことにした。集まった顔ぶれは最初のメンバー以外には伊達三位房游雅、聖護院庁の法眼玄基、多治見四郎次郎国長らであったが、目的が有るから先ずは御馳走に山海の珍味を取り揃え、上等の酒を十分に準備して、薄着をさせた二十余人の若い美人女性を席に侍らせてサービスに努めた。

そうした行事(宴会)を何度も繰り返してから、武装蜂起の相談をする前に、玄慧(げんえ)法師と言う知識人を呼んで中国の古書に記載された合戦の物語を講談調で聞かせたのである。玄慧さんは裏の事情を知らないから軍事談議を熱演した。

此の項目の表題が「附・玄慧文談の事」とあるので原本には其の内容が長々と書かれているけれども古代中国の話なので省略をする。宴会の主催者は士気を鼓舞してクーデターに誘おうとしたらしいのだが「玄慧文談」が景気の良い話では無かった為に出席者は嫌な気分になったらしい。

#### ○頼員回忠の事(よりかずかえりちゆう)の事

「かえりちゆう」とは「元の主君に背いて敵の主君に忠義を尽くす」ことらしいが、一般的に言えば裏切りのことである。此の場合は、誘われて一旦は謀反の誘いに加わった土岐一族の左近藏人頼員が其れを実行したのである。

此の人の妻は斎藤太郎左衛門尉利行と言う六波羅奉行の娘であった。クーデターの計画者は強盗に入る仲間に警察官僚の娘婿を勧誘した様なものであるから情報が漏れて当然である。誘われた土岐頼員は新婚ホヤホヤであったから、最初から加わらなければ良いのに謀叛に同意した後で、もし失敗した場合は…と余計な心配をして早々と妻に別れの言葉を告げた。此の女性がシツカリ者であったから直ぐに父親の許に駆け込み、夫から漏らされた計画を密告してしまった。

斎藤利行は驚いて娘婿を呼び出し、厳しく尋問したので頼員はあっさりと自白した上に、更に此の事に土岐頼定らが関わっていることなど、知り得た情報を残さず話して自分だけは助かる様に義父に懇願したのである。虫が良すぎる話だが…

公務員の立場で国家機密を知った斎藤利行は、夜明けを待っていては謀反人仲間と思われることを恐れ夜の明け切らぬうちに六波羅(幕府庁舎)に駆け込んで上役に大事を報告した。六波羅では鎌倉の本庁に早馬で急使を立てると共に京都近辺に

住む武士たちに非常召集を掛けた。

其の頃は召集された武士の到着順を運動会並みに記録したようで、是を「著到(ちやくとう)」を付ける」と言ったらしい。其れが済んでから武士たちには次の様な命令が下された。「摂津国(大阪府)葛葉地方の土着武士が幕府に背き合戦を起こした。是を鎮圧する為に各所に篝火(かがりび)を焚き、都の武士を召集したのである…」見当違いの命令を伝えたのは本来の謀反計画に関わった者たちを油断させるためであったらしい。是によりクーデターを企てた者たちは一時的に緊張したけれども陰謀が露見したとは思わずに居た。

一夜明けて元徳元年(一三二九)九月十九日には早朝から集まって来た幕府の軍勢で六波羅陣営が満席になった。其の中から小串三郎左衛門尉範行と山本九郎時綱と言う二人の武士が北条氏の紋が入った旗を授けられ討手の大将に指名された。これらの軍勢は二手に分けられ、多治見の宿所である錦小路高倉と土岐の宿所である三条堀川に向けられたのだが、堀川に向かった山本時綱は敵に察知されることを案じて軍勢を三条河原に留め置き、徒歩の家臣二人に長刀を持たせ、只一騎で土岐の居るホテルに近づいたのである。

馬を下りて小門から侵入し、中門の方を見ると宿直の武士が仮眠では無く宿泊者の様に武装を解き高軒(たかいびき)で寝ている。周囲を見渡しても他に警備の者は居ないらしい。回りは築地塀で出入口は他に無いから安心して襲撃が出来る。客室と思われる奥の部屋を開けると、狙った相手の土岐十郎は早起きしたばかりで髪の毛を直していた。流石に武士であるから黙って入って来た山本を見て女中と間違えることは無く立て掛けて

あつた太刀を取り障子を蹴破つて広間に移つた。

天井に太刀を打ち付け無い様に払い切りに仕掛けてきたのだが、山本は相手を捕らえるつもりであるから室内から庭へ誘き出した。暫くは二人で斬り合つていたけれども、周りに二千余の軍勢が居ることを知つた土岐十郎は、元の寢室へ戻つて腹を切つた。此の時に別室に居た土岐の家臣何名かが戦つて討ち死にしたので逃げた者は居ない。山本九郎時綱は土岐十郎の首を「任務達成の証拠品」として六波羅へ戻つて来た。

一方、錦小路高倉の多治見四郎宿泊先へは小串三郎左衛門尉が向かつたのだが、三千余騎を率いているから強気である。最初から関（とき）の声をあげて押し寄せた。攻められた多治見は酒好きで遅くまで遊女相手に飲んでいて、其の寝込んでしまひ丁度、前後不覚に眠りかけた頃に襲撃されたので慌てたけれども傍に寝ていた遊女が機転の利く女性であつたから、近くに置いてあつた鎧を手早く着せながら大声で叫んで、寝込んでいた家来たちを起こして回つた。

小笠原孫六という武士も、その声に起こされて太刀を持ち中門から走り出て見ると車輪の模様の旗が築地塀の向こうに見えた。それで六波羅の軍勢であると分かり、室内に取つて返して「先般の謀反計画が露見したと思われる！面々は太刀の目貫（留め金）の耐える限りは斬り合つて腹を斬れ！」と呼ばわつてから邪魔な腹巻を取つて肩に掛け、胡籙（えびら）矢筒に入れた二十四本（最大本数）の矢と強い弓を掲げて門の上の櫓に登り邪魔な板を外してから下に向かつて「大勢で押し掛けて来たようだが我らの手柄の程を見せてやろう。そもそも討手の大将は名を何と言うお方か？…近

付いて矢の一筋も受けてご覧なされ！」と叫び、それと同時に十二束三伏（強い弓）を力一杯に絞り込んで寄せ手の中へ射込んだのである。

寄せ手の軍勢は其れを良く見て居なかつたから先頭を進んで来た多分、伊豆の武士であろうと思われる狩野下野前司の若党で、衣摺助房（きぬすずりすけふさ）と言う者が兜の正面から射抜かれて馬から転落した。是を手初として小笠原孫六は二十三人の敵を射倒した。それから胡籙を捨てて残る一筋の矢を「冥途の旅の用心に」と腰に差し、

「日本一の剛の者、謀叛に與（くみ）し自害する有り様を良く見て人に語り伝えよ！」と叫んで太刀の切先を口に銜（くわ）え、櫓から飛び降りた。それも頭から落ちたから助かり様がない。其の間に多治見を始めとする二十余人は武装し直してから庭に出て、大門を閉め待ち構えていた。

押し寄せた人数は圧倒的に多かつたのだが相手は死に物狂いで居るから攻め込む方も躊躇する。其のうちに伊藤彦次郎と言う武士の父子兄弟が四人で扉の壊れたところから這つて侵入した。勇気有る行動だが戦うまでも無く討ち取られた。寄せ手の者たちは、其れを見て後は誰も近づかない。敵が来なくては商売にならないので、多治見たちは門を開き「討手の方々は卑怯に見えますよ。早く攻めて来なさい！御褒美に私たちの首をあげますよ…」と挑発した。其処まで言われたのでは面目が立たないから、攻撃軍の五百余人が馬を下りて狭い所から喚声を挙げて突入した。

二十余人は死を覚悟しているから一歩も引かず、五百余人の中へ乱入して斬りまくつたので一旦は敵を追い払つたのだが、先陣、二陣、三陣と敵は波状攻撃を繰り返してきた。合戦は午前七時頃か

ら始まつて昼過ぎ迄続き、両軍と言っても勢力が違い過ぎるけれども、全力を尽くして戦つた。

その中に攻撃軍の佐々木判官が千人ほどの兵を裏手になる錦小路に回し、非道にも民家を壊して背後から敵陣に攻め込んだ。是により多治見国長らは「今は是まで！」と覚悟して全員が中門に並び互いに刺し違えて自害した。是を知つた攻撃軍は大手（表）軍が門を壊している中に、搦め手（裏）の軍勢が入り込んで、自害した者の首を獲り六波羅へ引き揚げた。五、六時間の合戦で敵を二十二二人倒したのだが、攻撃した幕府軍の死者と負傷者の数は二百五十七名に及んだことになる。

○資朝・俊基関東下向の事、付・御告文の事

土岐と多治見が討たれて誰が見ても其の背後には後醍醐天皇や側近の者たちが関与していることが明白となつた。鎌倉幕府は「重大な謀反事件」と認識し、其の取り調べを行う為の使者として長崎四郎左衛門泰光と南条次郎左衛門宗直の両名を上洛させた。是により元徳二年（一三三〇）五月十日には日野中納言と右少辨俊基の両名が逮捕されてしまつた。二人は土岐らが襲撃された際に生存者が居なかつた…と聞いていたので、自分たちの事は知られないであろうと、油断をしていた。

予告なしに襲われたから本人はもとより、家族も家臣も逃げ場が無い。騎馬の俣で或いは土足で侵入して来た軍兵により家財は道路に放り出され座敷は馬糞で汚された。日野資朝は京都の日野に定着した藤原一門であり、後醍醐天皇の信任を得て反幕府運動に加担していたのである。俊基も藤原系と思われるが本来は、儒者（学者）である。原本には本業に専念していれば危難に遭わずに済んだ…と言う様なことが書いてあるけれども天皇

に誘われたのでは断れない。兩名は謀反人として五月二十七日に鎌倉へ連行されてしまった。

天皇の近臣ではあるが、幕府への謀叛に参加したのであるから直ぐにも処刑されることを覚悟していたけれども、幕府側も天皇の恨みを買うことに躊躇し、また庶民の評判にも気を使って、囚人には有るが檻（おり）には入れず、鶏の離し飼いの様にして侍所（さむらいどころ）武士の詰め所に預けて置いた。逃げることは出来ない。

七月に入って七夕の日を迎えた。鎌倉に護送された二名は鎌倉で星空を眺めていたが、後醍醐天皇のほうは通常ならば宮中で無駄な行事を催すのだが、幕府に睨まれている上に近臣が鎌倉へ連行されているから、幕府から何か言ってくるかと気が気で無く、公家たちが宮中に集まって来ただけでも、控室でお通夜のように一同が下を向いているしか無い。暫くして天皇が「誰か居るか」と呼んだので中納言の吉田冬房が御前に出た。

天皇は冬房に近寄り「資朝と俊基が捕らわれて幕府の疑いが朝廷に掛かっていると思うと心配でならない：何とかして幕府の疑いを晴らす手では無いものであろうか？」と訊ねた。聞かれた冬房も名案が有る訳ではないが「知りません！」とも言えないので「連行された兩名が何かを白状したという情報は有りませんか、幕府から追及されることは無いと思いますが油断は出来ません。取り敢えず、天皇から相模入道（高時）に宛てて御文を賜り、鎌倉の怒り（疑心）を解かれては如何でしょうか」と申し上げた。

不本意ながら天皇も納得して「それならば冬房が草案を書くように：」命じられたので其の通りにしたのだが、相手に諂（へつら）う内容でしか

書けない。自分で書かずに代筆させたので文句を言える立場では無いが、天皇に見れば日本では自分が一番偉い！と思っているから幕府の御機嫌を取る様な文面に悔しい思いしか無い。思わず涙がこぼれた。周りの公家たちも笑う訳にはいかない。萬里小路宣房（までのこうじのぶふさ）と言う大納言が勅使として派遣される事となり、其の手紙を持って鎌倉へ向かった。

鎌倉では北条高時が隠居をしても「入道」を名乗るだけで威張っていたから、天皇からの手紙でも料亭の請求書か何かのつもりで近臣の齋藤太郎左衛門利行に開封させようとした。それを老臣の二階堂出羽入道道蘊（にかいどうでわにゆう）どうどううんが諫めて次のように言った。

「天皇が武臣に対して直に手紙を下さることは異国でも我が国でも未だ其の例が有りません：それを通常の手紙同様に開封する事は冥見（みよけん）神仏の怒りに触れる恐れがあります。此の場合は、開かずに箱ごと勅使に御返しにならるべきと存じます。（用件は使者に聞いて）：」

何度も繰り返して諫言したのだが、天皇も自分の支配下に有ると思っっているから高時入道は聞かない。今回の陰謀は天皇の意思から出たことであるから、堅苦しい手紙などに騙されたい！として天皇を何処かへ島流しにする心算である。

齋藤に「読め！」と強制した。齋藤も逆らえない。読み進んで文面が「：叡心偽らざる処、天の照覧に任ず（後醍醐天皇の真意は神々の前でも恥じない）：」と書かれたところで齋藤利行は急に眩暈（めまい）がして鼻血が出た。立って居られないから這う様にして其の場を退出したけれども喉（のど）に腫れものが出来て血を吐きながら一

週間も苦しんで死亡した。

「澆季（ぎょうき）に及んで道塗炭に落ちぬ」と言う古代中国の諺がある。末世には道義心が廢れることを言うらしいが、此の度の幕府の様に君臣上下の禮を誤るときは、さすがに仏神の罰もあるか：と話を聞いた人々は恐れたのである。

高時入道も齋藤の変死を目撃しているから形の上では「天皇の治世に幕府は口を挟みません：」と返答をした。嘘でも幕府が臣下の礼で寄こした返書であるから、単純な朝廷は納得した。

幕府に逆らった二人も右少辨俊基は許されて、日野資朝は死罪から佐渡流罪に減免された。

（巻二へ続く）

## ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)

HP <http://www.furusato-kaze.com/>